最後に氏は此の種類の文書の中には、前に記した如く Salī（年）なる語によつて、日附けをせずに kṣāṇu なる語を用いたもの、若しくは此等の兩者を併せ用いたものゝあることを注意し、而して此の kṣāṇa なる語を解釋して、前の Lévi 氏の論文中に解く能はずとして殘された kṣum の語に及んで居る。

『此の kṣāṇa なる語は、庫車の近傍より見出さるゝ所謂B種のトカラ語なるもの、而して吾等が龜茲語と稱する國語で記せる文書の中に見ゆる kṣ m なる語と同一に用いられて居るやうで、從がつてまた同一意味で無けねばならぬ、思ふに kṣāṇa はゼンド語の χšāy が基で、ソグド語では χsevanē（王）、χšāvan（力）等の語を生じ、ペルシャ語では šāh なる語を生じてゐるもので、支配（rule）、統治（reign）などの意味ある名詞と見るべきであらう、文書に kṣāṇä salī と續けて見ゐてゐるのは、「統治の年」（year of the rull, regnal year）の意と思はれる。而して支那の屬地に於て此の統治年で年次を記することは恐らく支那の年號を眞似たものと見るべきであらう。龜茲語の Kṣum は此の Kṣāṇa より借りたものである』

此の說が正しいならば前に述べた Lévi 氏の推察はこゝに證明を得たことになる。

以上はたゞ兩論文の主要點の大意を紹介したばかりである、若し議すべくば多少の疑の存する所ないでもなからうが、それは兩論文の價値に關する程のものではない、兩者ともに研究の行き方が極めて鮮やかで、僅かな記錄の斷片から頗ぶる大なる結果を齎らし得たものである。

朝鮮史の栞（第五回）

文學士　今西龍

（朝鮮三國時代の地理を研究せんには溯りて

韓諸國支那郡縣の地理に及ばざれば三國時代の地理亦研究すること能はず。これには漢書地理志を初めとして、唐書地理志に收むる賈耽道里記に至るまでの遼東及び朝鮮半島に關する部分及び史記朝鮮傳以下唐書に至るまでの東夷傳中の記事を精査すべきものなり。此事前回の記事中に脫漏せしを以てこゝに追記す）

三國史記地理志に就きては三國史記の條に少しく記せり。高麗史地理志は主として梁誠之の手に成りしものゝ如し。王氏高麗時代州縣の沿革を叙し其記する所輿地勝覽の沿革記事と大差なし。三國史記地理志の說は其まゝ襲用せり。古代地理の研究には三國史記地理志とともに必ず見ざるべからざるものなり。

慶尙道地理志は世宗王六年甲辰（1424 A.D.）及七年乙巳に朝鮮地理志纂成の資料として八道に規式を示して各地理志を纂成せしめ春秋館に轉送を命ぜしに是歲慶尙道より提出せしものなり。今存ずるは其副本とす。慶尙道地志續撰は睿宗王元年己丑（1469 A.D.）八道に命じて前志を續撰せしめしとき慶尙道の提出せしものなり。

前志は副本を續志は原本を韓國政府より總督府に受け繼ぎしより係り員諸氏の注意を引き貴重圖書として保管されありしが昨年三浦博士係員の一氏より其存在を聞知して之を精讀し其研究を發表せられしかば廣く世に知らるゝに至れり。博士の所說は朝鮮彙報大正五年　月號及藝文第八年第一號にあり。就て見るべし。

世宗大王地理志八卷は前記世宗王の時敎命を以て各道より提出せしめし地理志（前記慶尙道地志は其一なり）其他の資料に據りて史臣尹淮申穡等が推覆して纂成し世宗王十四年壬子（1432 A.D.）に成りし地理志ありしを文宗王代に世宗王實錄を撰するに當り此地理

志の各道の記事の末に壬子後に起りし州鎮新設屢合沿革記事を續附して之を實錄地理志として實錄中に編入せしものなり。實錄の一部東京帝國大學に保管せられてより東大の研究者は沈重の態度を以て孜々として其研究に從事し此地理志の如きも別に謄寫相傳へて研究するに至れり。

此書八卷各道を一卷とし先づ道沿革を記述し次に各府州郡縣に就きて其官員、沿革、城廓、宮殿祠宇、山川、四境、人口、軍數、姓氏、人物、陵墓、古傳、靈異、土貢、田結、土宜、陶器所、驛院、烽火、牧場、寺刹等を擧げたれども沿革土宜等二三の事項の記事を除けば他は輿地勝覽に比して甚だ簡略なり。但し戶口軍數陶器所田結等の各項は勝覽に全く削除せり。

當時慶州府には三國史記三國遺事の冊板を藏し其書の流布すること京城よりも多かりしを以て慶尙道地誌が其沿革を叙するに當り三國史記地理誌を採りしことは明白なり。實錄地理志に至りては三國史記地理誌の未詳とせるを更に研究を進めて考証せるものあり。小生は慶尙道地志を撿せし時疑を生じ且つ研究上の興味を感せしは其各郡縣戶口數なりしが更に實錄地理志に誌す相當郡縣の戶口數を見しに慶尙道地志と其編纂年代が數年を距るにも關せず何等の增減なきに一層疑を深くせしに實錄地理志に本朝人口之法不明錄于籍者僅十之一二國家每欲正之重失民心因循至今故各道各官人口之數止此云云と注記せるを見て實情を知るを得たり。八道地理誌は輿地勝覽より更に研究の歩を進めんとするものの見るを要するものなり。

新增東國輿地勝覽

五十五卷、李朝官撰の地理誌なり。此書第一稿本五十卷成宗王十二年に成りしを更に改撰し新撰輿地勝覽五十五卷として王十八年丁未に成りしを刊行頒布せしが燕山君の代に又讐校訂正して五十五

卷とし刊行せしも王の末年には其私藏を禁じたる事あり。現今世に存ずるものは中宗王代に至り燕山時代に訂正添削せし書に新記事を添錄せしものにして新增東國輿地勝覽と稱し五十五卷あり。其成るや直に刊行せられて廣く世に流布せしが後壬辰の役に冊板散失し冊子また稀少となりしかば光海君の時二三の改訂を行ひ其三年辛亥再び刊行せり。現今世上に存在するもの多くは此の再板本なり。

本書は政府の力を以て諸種の材料を蒐集し史臣及一流の學者の撰せしものなり。彼の實錄地理志の如きは其資料の一なりしなるべし。本書編纂の次第につきては東洋時報第二百六號（大正四年十二月號）所載の拙稿「朝鮮書籍解題」二十一東國輿地勝覽に詳述せり就て見られたし。右解題に「本書は大明一統志に倣ひ云云」と書せるは當時小生の研究淺薄なりしより出でし誤謬なるを以て茲に訂正せんとす。本書は躰裁を大明一統志に法りしと雖徒らに一統志の躰裁凡例を移しとりしものにあらずして方輿勝覽（宋の祝穆撰）と大明一統志との凡例を取捨し更に添削せるものなり。

本書の題詠の一目を設けたる外に名勝古蹟に關する詩賦序記や關係物件の下に臚列せるは範を方輿勝覽にとりて勝覽と名づけたる所以にして單に地誌を以て見るべきにあらず。大明一統志には仙釋の一條あるを本書は全く削除せり。而して最も注意すべきは彼の慶尙道地理志に誌せる地誌書き上げの規式を見るに「本邑姓氏某某合屬某縣姓氏某某是如分棟施行事」とありて地方の姓氏を記錄せしめ實錄地理志にも姓氏の一條目あり輿地勝覽にも此の一條目あることなり。姓氏を錄することは方輿勝覽にも大明一統志にも其他支那地誌類に見ざる事にして朝鮮地誌の特色なりといふ。此姓氏の條目の支那撰述の地誌に無きことを注意

すべしとは稻葉岩吉氏より與へられたる敎示なり小生の考出したるものにあらず）

本書は二京及八道の州府郡縣の各に就て、建置沿革、郡名、姓氏、風俗、形勝、山川、城郭、烽燧、宮室、學校、驛院、橋梁、部坊、公廨、佛宇、祠廟、陵寢、古蹟、名宦、人物、孝子、烈女、題詠等に目を分ちて記述し且つ詩賦序記を收錄せり。其編纂以來李朝の地方行政區劃には變動なかりしにあらずと雖大体に於ては其後四百年間大變革なかりしを以て其記事中の或るものは近代もしくば現代に至るまで變革なきものとして直に採りて參考に資する事をうべしと雖本書が約四百年前撰述の書なることは此書を參考するに當り念頭を去らしむべからず。

本書は幾多の資料より編纂せしものなるを以て記事に誤謬または矛盾あること少なからず。小生が精細なる調査をなせしは未だ一小部分にすぎざるも此中より既に數條を發見せり。然ども是れ實に一微細なる小疵にすぎず本書の價値はこれによりて減ずるものにあらず本書は朝鮮の歷史地理研究に典據とすべき重要書籍にして李朝文藝史を飾るに足るものなり。尤も其地方沿革記事の如きは三國史記地理志に記事あるものは之を採れり。本書沿革の條と高麗史地理志とは執筆者を全うするが如きを以て彼此相證用すべきにあらず。沿革の記事には撰者の獨斷若くば前人の獨斷說も少なからざるべし。本書の中宗王代の刊本は極めて稀少にして小生の知る所のものは內閣文庫の文祿慶長役分捕本あるのみにて。其他にて見し刊本は光海君三年の刊本なり。これとても多く遺存せず。近年の活字本に京城刊本と朝鮮古書刊行會本とあり。京城刊本は刊缺甚しき惡本を底本とせるを以て空闕多くして全く用をなさず、古書刊行會本は光海刊本より出でし寫本を底本とせるものなり。此刊

本出でてより何人たりとも容易に此書を購求するをうるに至れり。

批評

伊能忠敬

理學博士 長岡半太郎監修
理學士 大谷亮吉編著

理學博士 小川琢治

元和偃武の後百年に亙れる平和により儒學の普及に伴ひ蘭學も亦た漸く輸入の途が開けて、科學的研究の精神が一部の有識人士の間に醞釀することになつた。而して此の精神の勃興を促したのは、醫學天文學地理學等の方面に於て、在來の醫方曆法が人體の解剖天象の觀測を無視した傳說的のもので、長崎の門戸から輸入された西洋科學に比して殆んど兒戲に類して居た其の懸隔を覺知した爲めであつた。就中强い刺戟を與へたのはハンベンゴロウ即ちベニヨフスキーのカムチャツカ脫走の途次我が海岸に立寄つて傳へた露人圖南の警報が事實となつたことで、是が爲めに朝野有識者は北邊警備の必要を感ずると共に當時比較的未知の蝦夷地理を確知せんとするに至つたのである。此の機運が生んだ日本地理探撿史上の幾多の英雄の中で最も偉大な一人物は伊能東河先生其人で、今回學士院から長岡博士の監修の下に大谷理學士の編纂された傳記によつて其性格閱歷事業が初めて十分なる光輝を發揮することになつた。

伊能東河先生の事蹟は近年種々の書物に見れ、又た單行の傳記もあつて、今より百年前に我が帝國四大島の測地事業を完成し帝國地圖の基礎を置いた偉人として、其名は小學兒童にも膾炙して居るが、其の事業功績を根本資料に就いて研究したものでなく、又た著作者が其の科學的價値を正確公平に判斷するに足るだけの專門的素養を缺いた